

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

平成31年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第1号（4月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401

南さつま市金峰町大野 2200

TEL 099-245-1081（代表）

099-245-1157（直通）

099-245-1149（FAX）

テレホンサービス

鹿児島 099-296-6430

296-6431

ホームページアドレス：<http://www.jpjn.ne.jp/kagoshima>

メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp

農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理，安全使用
2. 作物に対する安全 適期，適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川，湖沼，海などへの汚染防止)
(養蚕，養蜂などへの危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

農薬ラベルを確認しましょう。
農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう。

平成31年度病虫害発生予報 第1号

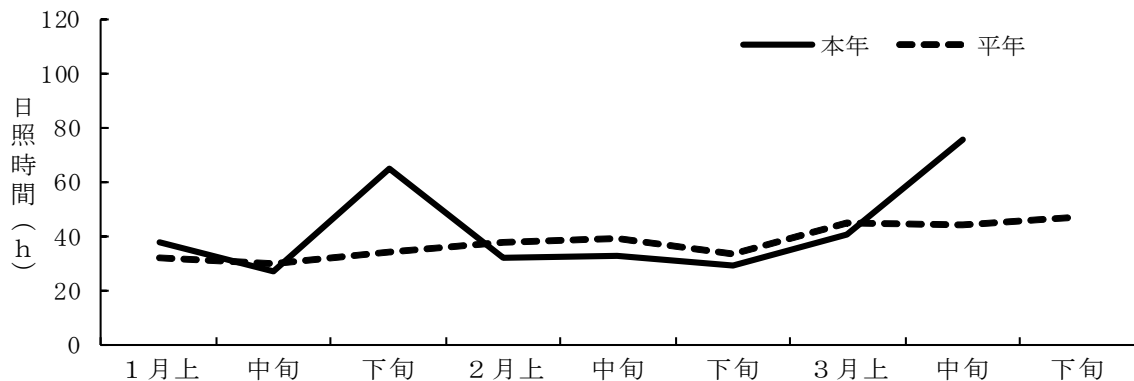
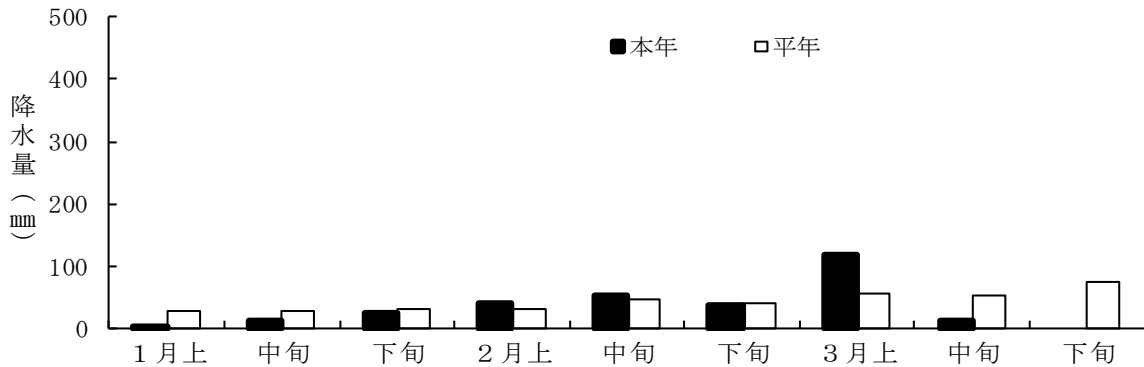
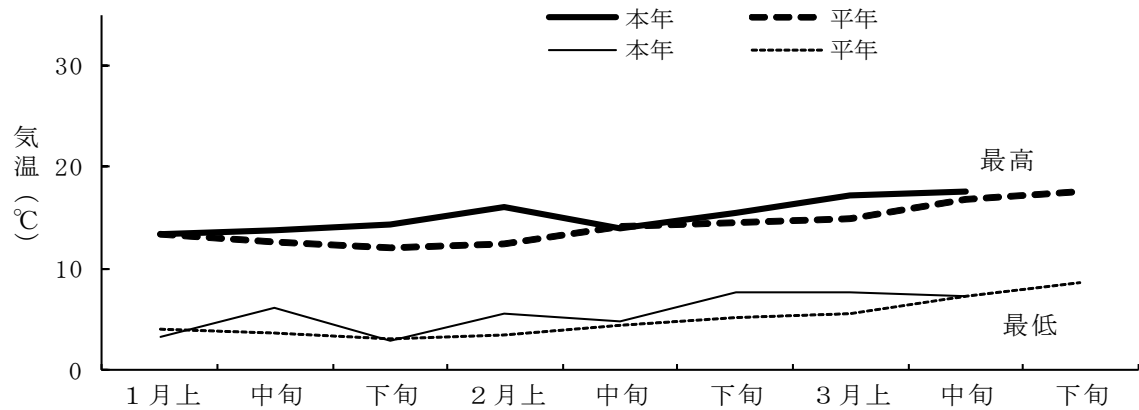
平成31年3月28日
鹿児島県病虫害防除所

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（3月30日から4月29日） 平成31年3月28日 鹿児島地方気象台 発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	30	40	30	九州南部，奄美地方ともに気温，降水量，日照時間のいずれも概ね平年並みの見込み。
	奄美地方	30	40	30	
降水量	九州南部	40	30	30	
	奄美地方	40	30	30	
日照時間	九州南部	30	30	40	
	奄美地方	30	30	40	

II. 1～3月の気象情報（鹿児島地方気象台 観測点：加世田）



【病害虫発生予報の概要】

作物		病害虫名	発生量	
			現況	予報
野菜	キュウリ	べと病	多	多
		アザミウマ類	並	やや多
		コナジラミ類	並	やや多
	トマト	疫病	並	やや多
	ピーマン	うどんこ病	並	やや多
		斑点病	並	やや多
	イチゴ	アザミウマ類	多	多
		ハダニ類	並	やや多
	施設野菜共通	灰色かび病	並	やや多
	キャベツ	菌核病	やや多	やや多
	エンドウ類	ハモグリバエ類	やや多	多
		アザミウマ類	やや多	多
	ソラマメ	赤色斑点病	並	並
	バレイショ	疫病（県本土）	並	並
〃（熊毛地域）		並	並	
花き	キク	白さび病（県本土，施設）	並	並
		ハダニ類（県本土，施設）	やや多	多
		アザミウマ類（県本土，施設）	やや少	並
果樹	カンキツ	そうか病（県本土・熊毛地域）	並	並
		〃（奄美地域）	並	並
		かいよう病（県本土・熊毛地域）	やや多	やや多
		〃（奄美地域）	やや少	やや少
		ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	並	並
〃（奄美地域）	やや少	やや少		
茶樹	チャ	カンザワハダニ	並	やや多

【 病 害 虫 発 生 予 報 】

I. 野 菜

1. キュウリ

(1) ベと病

ア 予報内容

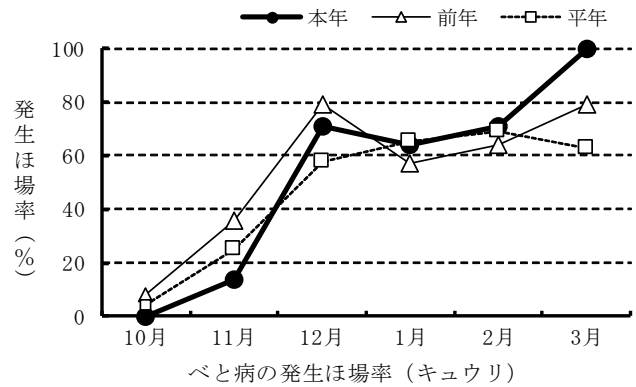
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率100%（平年62%）：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 多湿条件下で発生しやすいので、ハウスの通風換気に努める。
- (イ) 発病葉は早めに除去し、ハウス外に持ち出して処分する。
- (ウ) 肥料切れや草勢の衰えは発生を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (エ) 多発すると防除が困難になるので、発生初期の防除に努める。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

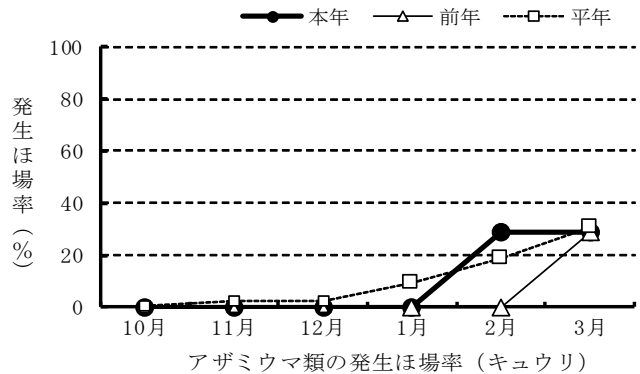
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率29%（平年30%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 主な発生種はミナミキイロアザミウマで、キュウリ黄化えそ病 (MYSV) を媒介する。
- (イ) ハウスの開口部等に青色粘着トラップを設置し、早期発見と初期防除に努める。
- (エ) 葉裏など薬剤のかかりにくい場所に生息するので、薬剤散布は丁寧に行う。
- (オ) カブリダニ類等の天敵を放飼しているほ場では、天敵に影響の少ない薬剤を選択する。
- (カ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。



(3) コナジラミ類

ア 予報内容

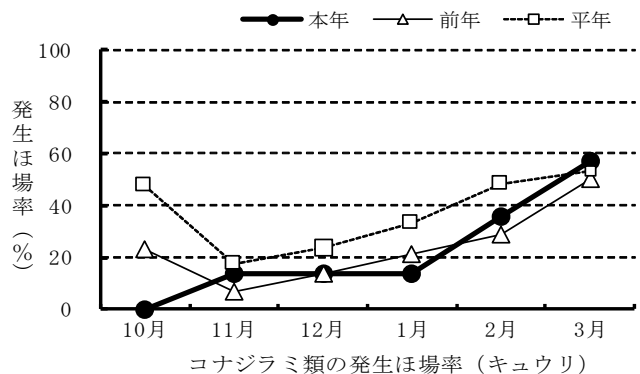
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率57%（平年53%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ウリ類退緑黄化病 (CCYV) を媒介する。
- (イ) ハウスの開口部には必ず防虫ネットを設置する。
- (ウ) 黄色粘着トラップを設置して早期発見・初期防除に努める。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



2. トマト

(1) 疫病

ア 予報内容

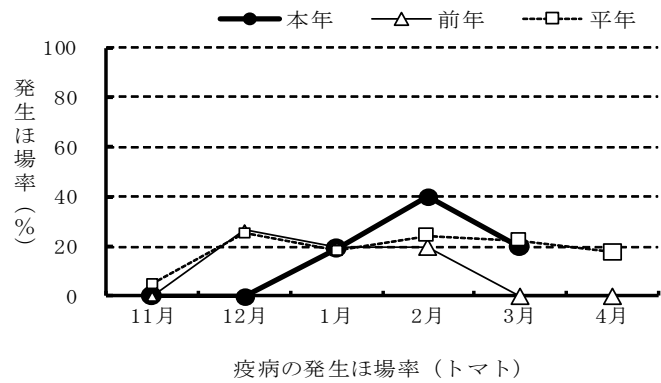
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率20%（平年23%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ハウスの通風換気を十分に行ない、過湿にならないよう努める。
- (イ) ハウス内の湿度が高く結露が多い場合は、強制的に加温を行い湿度低下を図る。
- (ウ) ハウスの谷部や北側等、結露し水滴の落ちやすいところで発生が多いので、早期発見に努め、早めに防除する。
- (エ) 発病すると急激にまん延しやすいので、発病茎葉は速やかにハウス外へ持ち出し、薬剤を散布する。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



3. ピーマン

(1) うどんこ病

ア 予報内容

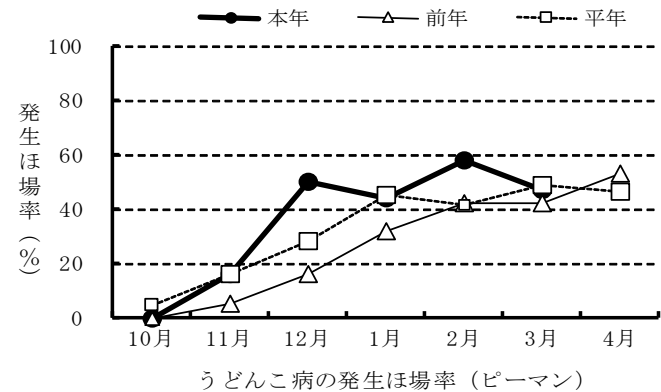
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率47%（平年48%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発病葉は早めに除去し、ハウス外に持ち出して処分する。
- (イ) 草勢低下は発生を助長するので適正な肥培管理に努める。
- (ウ) 薬剤は下位葉や葉裏に十分かかるよう散布する。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤とのローテーション散布を行う。



(2) 斑点病

ア 予報内容

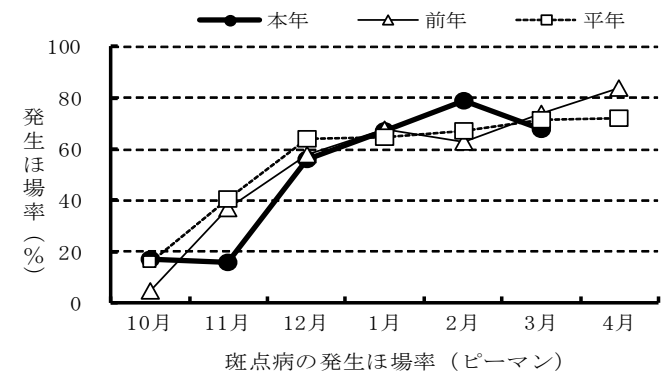
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率68%（平年72%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 多湿条件下で発生しやすいので、ハウス内の通風換気に努める。
- (イ) 発病葉はできるだけ持ち出して処分し、菌密度の低下を図る。
- (ウ) 成り疲れなどによる草勢低下により発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
- (エ) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



4. イチゴ

(1) アザミウマ類

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 多

イ 予報の根拠

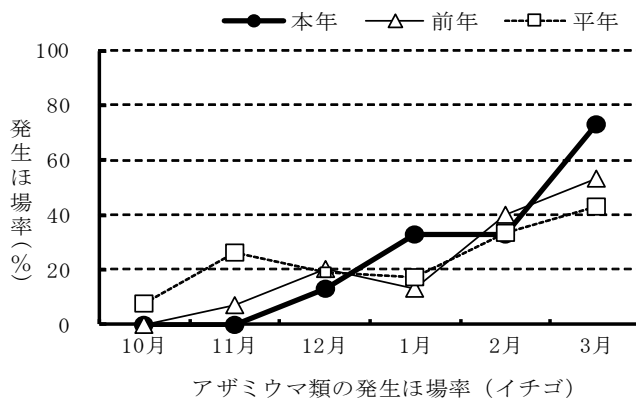
- (ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率73%（平年43%）

：やや高い（+）

発生程度の高いほ場を認めた（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 主な発生種はヒラズハナアザミウマである。
- (イ) ハウスの開口部に防虫ネットを設置する。
- (ウ) ハウスの開口部等に青色粘着トラップを設置し、早期発見・初期防除に努める。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。
- (オ) 薬剤の使用にあたっては、ミツバチへの影響に注意する。
- (カ) ヒラズハナアザミウマは花の中などに生息するので、薬剤散布は丁寧に行う。
- (キ) ハウス周辺の雑草は増殖源となるので、除草に努める。



(2) ハダニ類

ア 予報内容

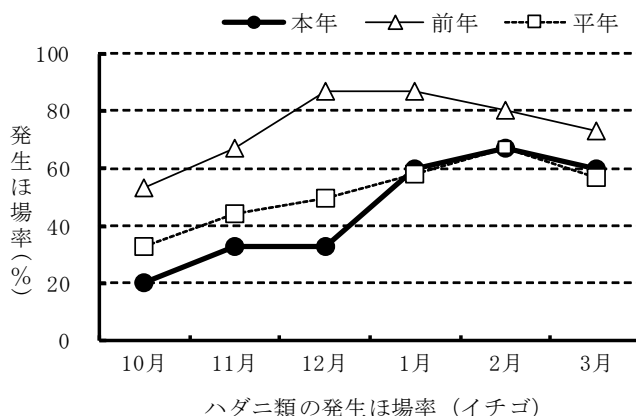
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率60%（平年57%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 気温の上昇とともに急激に増殖する。
管理作業時に注意深く観察し、初期防除に努める。
- (イ) 寄生葉や摘葉した葉は、ほ場外に持ち出し処分する。
- (ウ) 薬剤の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから、葉裏にかかるよう丁寧に散布する。
- (エ) チリカブリダニ等の天敵を導入しているほ場は、天敵に影響の少ない農薬を選択する。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。
- (カ) 薬剤の使用にあたっては、ミツバチへの影響に注意する。



5. 施設野菜共通

(1) 灰色かび病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作物 キュウリ, トマト
イチゴ, サヤインゲン
- (ウ) 発生量 やや多

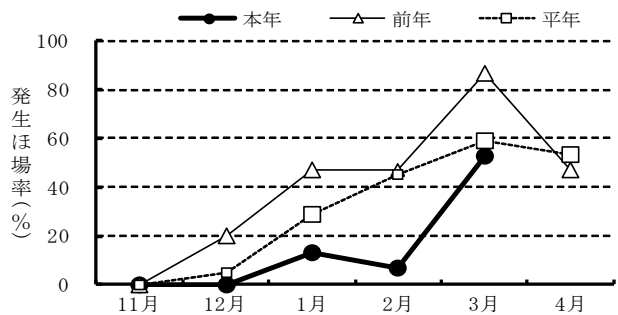
イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並

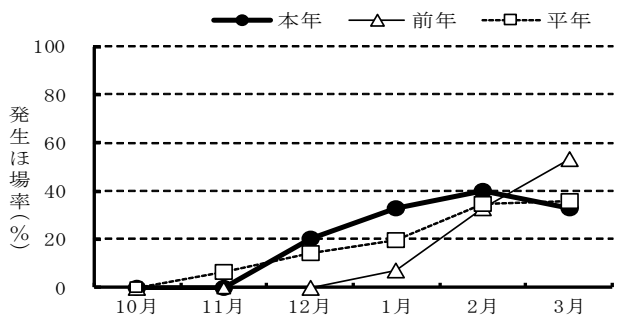
作物名	発生ほ場率 (%)		発生量
	本年	平年	
キュウリ	14	13	並
トマト	53	59	並
イチゴ	33	36	並
サヤインゲン	25	78	やや少

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ハウスの通風換気を十分に行ない、過湿にならないよう努める。
- (イ) 果実部やへたの付近に付着する花卉は本病の発生源となるので、こまめに除去する。
- (ウ) 発病葉や発病果実はビニール袋等に入れてほ場外へ持ち出し、適切に処分する。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



灰色かび病の発生ほ場率 (トマト)



灰色かび病の発生ほ場率 (イチゴ)

6. キャベツ

(1) 菌核病

ア 予報内容

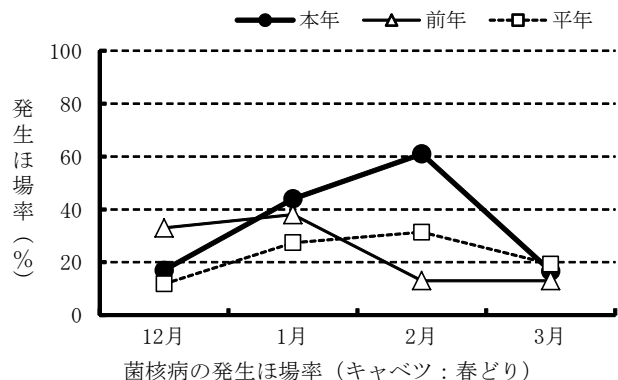
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率17% (平年19%)：並
発病程度の高いほ場を認めた (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 気温上昇に伴い、ほ場湿度が高いときに発生しやすいので、予防散布に努める。
- (イ) 病原菌は葉柄基部付近から感染するので、薬剤は株元や結球基部へ十分かかるように散布する。
- (ウ) 発病株は次年度の伝染源となるため、ほ場外に持ち出し処分する。
- (エ) 収穫が終わったほ場は、残渣を早めにすき込み分解を促す。



菌核病の発生ほ場率 (キャベツ：春どり)

7. エンドウ類

(1) ハモグリバエ類

ア 予報内容

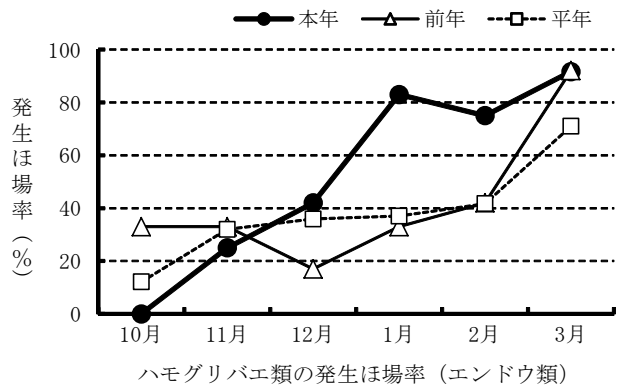
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率92%（平年71%）
：やや高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 主な発生種はマメハモグリバエである。
- (イ) 多発してからの防除は困難なので、防除を徹底する。
- (ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

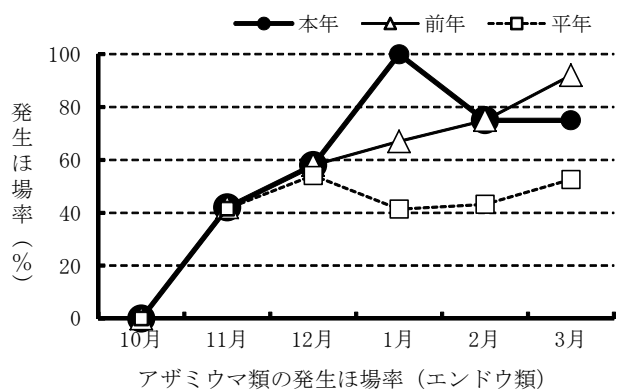
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率75%（平年53%）
：やや高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 主な発生種はハナアザミウマである。
- (イ) 薬剤のかかりにくい花卉の奥や若莢に寄生するので、丁寧な薬剤散布に努める。
- (ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



8. ソラマメ

(1) 赤色斑点病

ア 予報内容

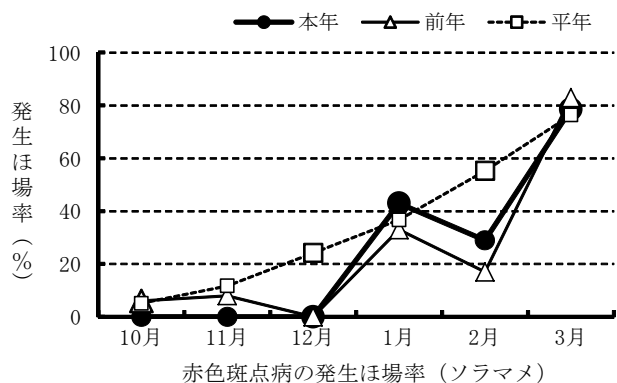
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率79%（平年76%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発病葉は早めに除去し、ほ場外に持ち出して処分する。
- (イ) 排水不良のほ場で多発する傾向があるので、排水対策に努める。
- (ウ) 気温が上昇すると急速に蔓延するため、予防散布に努める。



9. バレイシヨ

(1) 疫病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土, 熊毛地域
- (イ) 対象作型 春作
- (ウ) 発生量 県本土：並
熊毛地域：並

イ 予報の根拠

<県本土>

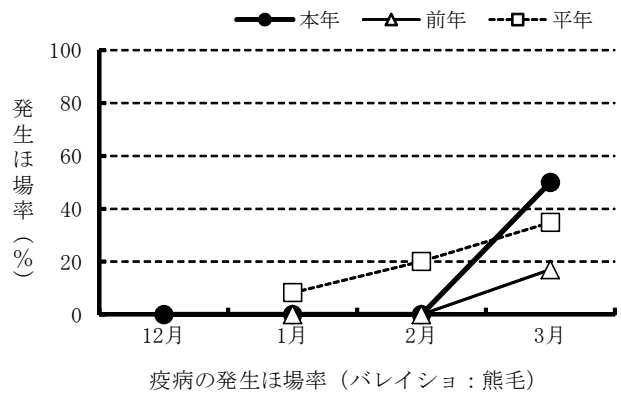
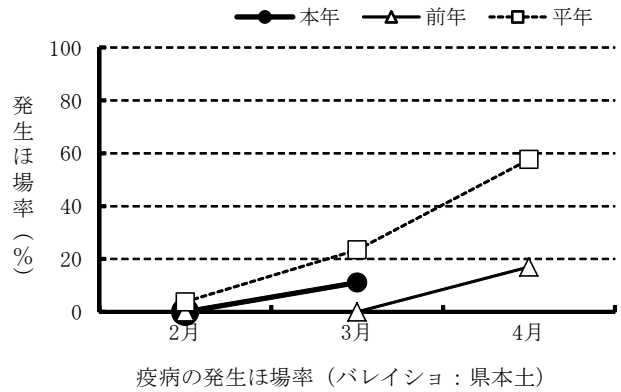
- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率11%（平年23%）：並

<熊毛地域>

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率50%（平年35%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 降雨が数日続くと発生しやすく、発病後は急速に病勢が進展するので、防除は予防散布に重点をおき、適期を逃さない様に注意する。
- (イ) 地域の防除基準に従って薬剤散布を行い、疫病の進展や降雨状況に応じて追加散布を行う。
- (ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。
- (エ) 伝染源となる発病株や収穫残さはほ場外に持ち出し、適正に処分する。



防除に関する今月の留意事項

1. キャベツ収穫後の耕種的病害対策 (菌核病, 根こぶ病)

キャベツ収穫後は次作の病害発生を抑えるため、以下の点を考慮した総合的な防除対策に努める。

○菌核病対策

- (1) 菌核病の発生が少ないほ場は、菌核をほ場に落とさないよう菌核病株を抜き取り、ほ場外へ持ち出し、適切に処分する。
- (2) 菌核病の発生が多いほ場では、プラウ等で地下10cm以上深に埋没できるよう天地返しを行い、次作にアブラナ科野菜、レタス、ゴボウ等を栽培せず、輪作を行う。

○根こぶ病対策

- (1) 根こぶ病は、特にトラクター等の作業機の出入口付近の株で見ることが多い。出入口付近の株を引き抜き、こぶ状のものがあるか否か目視で確認する。
- (2) 根にこぶ状のものが付着してしている場合は、根こぶ病の発生が考えられるので、最寄りの地域振興局・各支庁の農政普及課もしくは病害虫防除所に連絡する。
- (3) 根こぶ病の発生ほ場では、作業機械等による汚染土壌の持ち出しを防ぐため、作業機械は丁寧に洗浄する。また、発生ほ場の管理は最後に行うなど、被害を拡散させないように注意する。

2. 奄美地域のバレイシヨの収穫後の耕種的病害対策 (菌核病)

収穫残さ(菌核)が翌年の一次伝染源となるので、収穫後は以下のほ場管理を適切に行う。

- (1) 収穫後の病害の茎葉、いもやくずいも等は、ほ場外に持ち出し、適切に処分する。
- (2) 菌核病の発生が多いほ場では、次作にサトウキビ、イネ科牧草等の輪作を行う。

II. 花き (キク)

(1) 白さび病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土 (施設)

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率11% (平年10%)：並

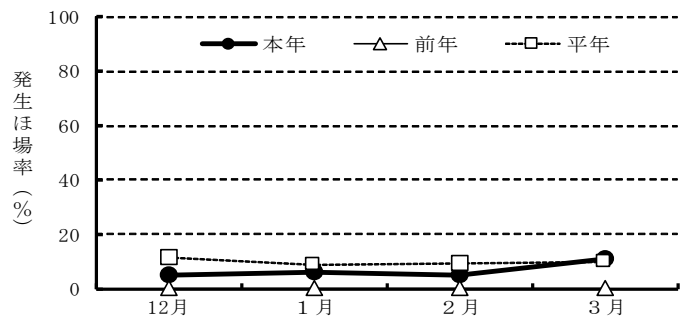
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 母株からの持込みを防ぐため、予防散布と初期防除を徹底し、無病穂の育成に努める。

(イ) 発病葉は、早めに摘み取って施設外へ持ち出し、適正に処分する。

(ウ) 通風換気に努め、過湿にならないようにする。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



白さび病の発生ほ場率 (県本土 施設)

(2) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土 (施設)

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率44% (平年30%)

：やや高い (+)

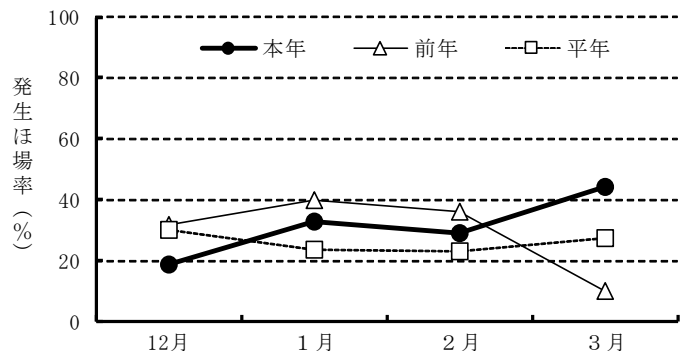
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生するケースが多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と初期防除に努める。

(イ) ほ場内と周辺の雑草や収穫後の残さ等は早めに除去し、適正に処分する。

(ウ) 薬剤は葉裏までよくかかるように十分量を散布する。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



ハダニ類の発生ほ場率 (県本土 施設)

(3) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土 (施設)

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率6% (平年14%)

：やや低い (-)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) アザミウマ類はキクえそ病(TSWV)、キク茎えそ病(CSNV)を媒介するので、ほ場への侵入防止と早期発見および初期防除に努める。

(イ) 母株や苗の導入に際しては、アザミウマ類の寄生やウィルス感染に細心の注意を払う。

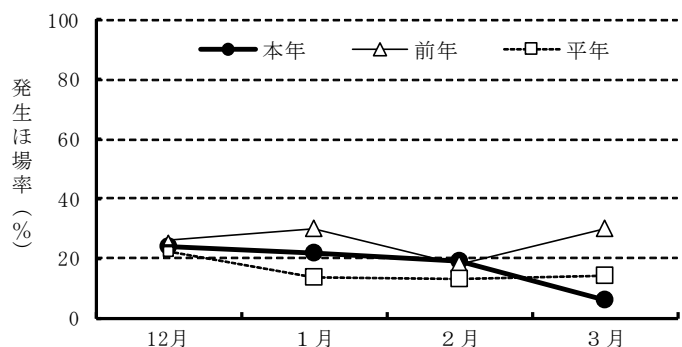
(ウ) 施設では開口部に目合い0.6mm以下の防虫ネットを張る。発生動向を把握するためには出入口や開口部付近での青色粘着シートの設置が有効である。

(エ) 除草等の環境整備を行うとともに、母株の防除を徹底する。

(オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(カ) クロゲハナアザミウマは中下位葉にも寄生しているため、薬剤は下葉の葉裏までかかるよう丁寧に散布する。

(キ) 栽培終了後は、速やかに残渣を処分する。



アザミウマ類 (被害葉) の発生ほ場率 (県本土 施設)

Ⅲ. 果 樹

1. カンキツ

(1) そうか病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 並

奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

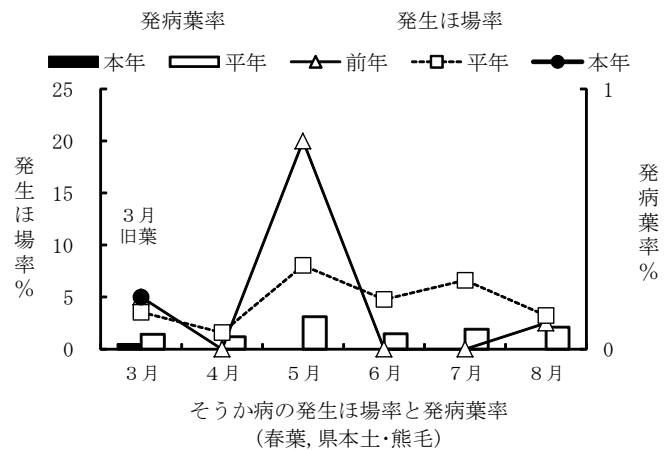
(ア) 調査結果(旧葉) 発生量：並
 発生ほ場率 5% (平年 4%)：並
 発病葉率0.02% (平年0.1%)：並

<奄美地域>

(ア) 調査結果(旧葉) 発生量：並
 発生ほ場率0% (平年 0%)：並
 発病葉率0% (平年0.0%)：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 春梢発芽期，落花期の防除適期を逸さないように努める。
- (イ) 開花期以降のデランフロアブルとマシン油乳剤の近接散布は薬害を生じる恐れがあるので散布間隔は30日以上あける。
- (ウ) 枝の混み合う部分は整理し，樹冠内の風通しをよくする。



(2) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 やや多

奄美地域 やや少

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

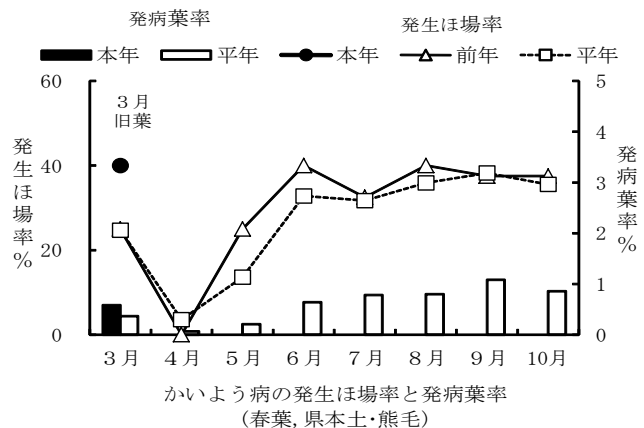
(ア) 調査結果(旧葉) 発生量：やや多
 発生ほ場率 40% (平年25%)：高い(+)
 発病葉率0.6% (平年0.4%)：やや高い(+)

<奄美地域>

(ア) 調査結果(旧葉) 発生量：やや少
 発生ほ場率0% (平年 14%)：やや低い(-)
 発病葉率0% (平年0.7%)：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発芽前に防除していない園地では，発芽期に防除する。
- (イ) 銅水和剤の使用にあたっては，薬害を軽減するために炭酸カルシウム剤を必ず加用する。



(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 並

奄美地域 やや少

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果(旧葉) 発生量: 並

発生ほ場率 18% (平年 11%)

: やや高い (+)

寄生葉率 0.2% (平年 0.6%): 並

<奄美地域>

(ア) 調査結果(旧葉) 発生量: やや少

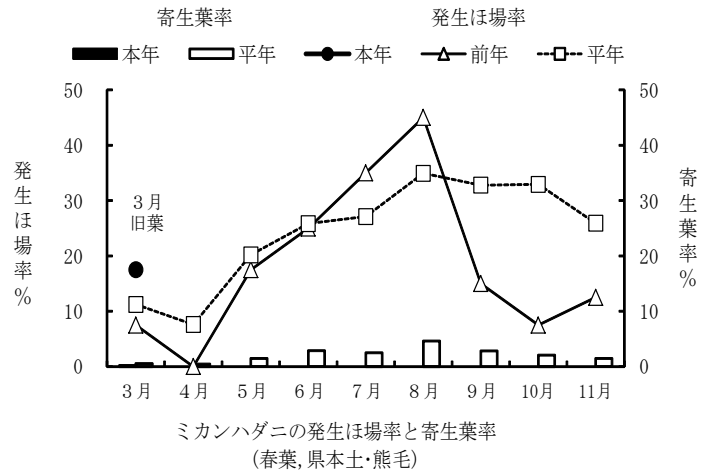
発生ほ場率 0% (平年 14%): やや低い (-)

寄生葉率 0% (平年 1.9%): やや低い (-)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 1葉あたり雌成虫数0.5~1.0頭(寄生葉率で30~40%)を目安に防除する。

(イ) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、春期~夏期にかけては、マシン油乳剤(97%)を主体とした防除を行う。



防除に関する今月の留意事項

1. ナシ黒星病

花芽りん片の越冬病斑が多いほ場がみられる。開花期前後は柔らかい組織が露出し、黒星病に感染しやすいため、防除対策に努める。

(1) 防除は新梢伸長期を重点に、約10~14日間隔で予防散布を行う。なお、農薬散布は天気予報に留意し降雨前に行う。

(2) 効果の高い薬剤(SBI剤等)を連用すると耐性菌の発生リスクが高まるので、連用は避ける。

IV. 茶 樹

(1) カンザワハダニ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 59% (平年 53%) : 並

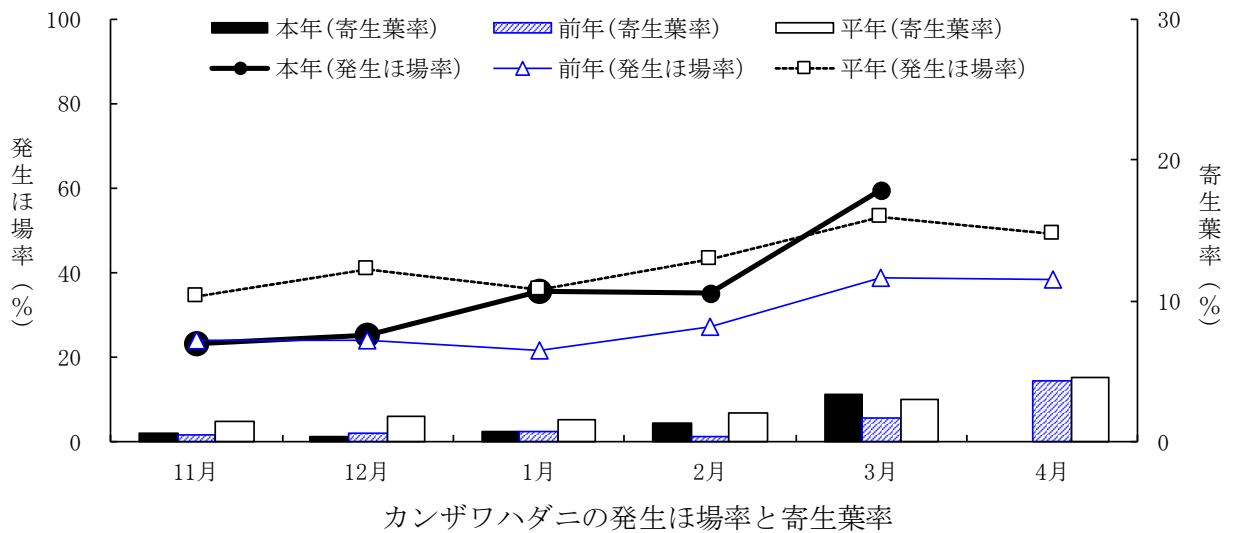
寄生葉率 3.4% (平年 3.0%) : 並

定点無防除園の寄生葉率 (3月中旬) 13% (平年 4.3%) : やや高い (+)

〃 産卵数 (3月中旬) 141個/100枚 (平年 55.4個/100枚) : 多 (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発生の多いほ場では、一番茶萌芽期から1葉期に防除を行う。
- (イ) 摘採後にも発生が多い場合は、整枝または刈番茶摘採後、早めに防除を行う。
- (ウ) 本種の全生育ステージに効果の高い薬剤で、裾部・葉裏に十分にかかるよう留意して散布する。
- (エ) 気温が高くなり乾燥が続くと、急激に増加することがあるので、発生に注意する。



農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋など）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. **散布時には薬剤がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。**
6. **クロルピクリン剤は、住宅地および畜舎に隣接するほ場や、無風の時、土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。**
7. ランネート剤は毒性が強いので、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬および使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病虫害の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等を総合的に基づいた総合評価。
- 発生ほ場率と調査場所を記載しない発生数・発生率は、巡回調査の結果。
- 果樹と茶樹の定点防除園又は無防除園は、果樹部と茶業部での調査結果。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（＋）、（－）は、発生量の増加、減少要因を示す。
- 気象予報は、向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平年を用い、本年調査値の後に（平年〇〇）で表記する。ただし、過去3年間の平均値を用いた場合は（過去3年〇〇）と表記する。